

ご視聴の皆さまへ

- 配信動画および資料の著作権は、横浜市リハビリテーション事業団が保有します。
- 動画および資料の無断転載、複製、転用、販売等の二次利用は、固く禁じます。
- この配信動画は、当センター利用者の保護者の方のみ視聴可能です。
- 第三者に動画および付属資料の URL を拡散することはお控えください。



子どものころをのぞいてみよう

①子どもの発達

横浜市西部地域療育センター
(心理士)

YRS
YOSHIDA REGIONAL
SUPPORT CENTER

基礎講座 「子どものころをのぞいてみよう」①子どもの発達について心理士からお話します。

子どもの発達と特性

(1) こころを見る視点①「発達」

発達の段階・領域・ペース

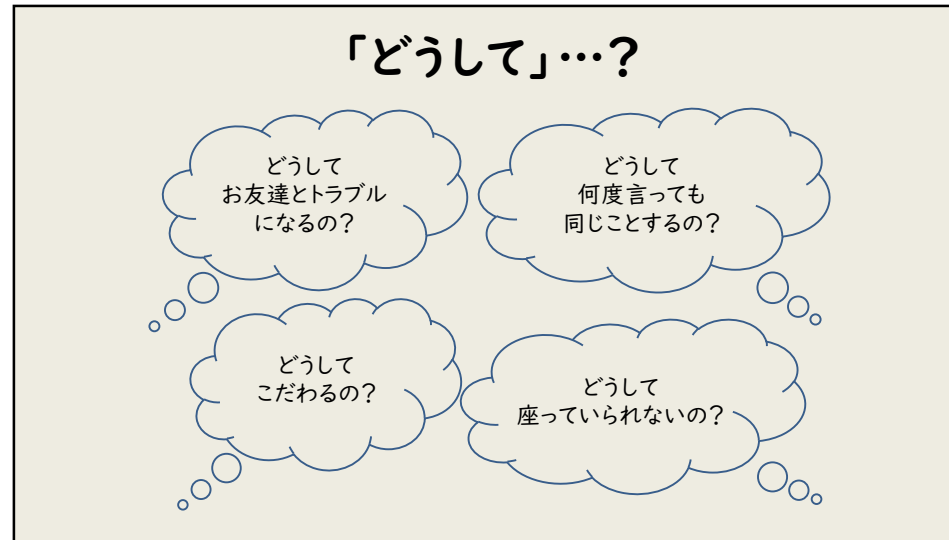
(2) こころを見る視点②「特性」

凸凹があるお子さんのわかり方・感じ方

この講座では、2部構成でお話します。

①では発達についてです。「こころ」を見る時に必要な視点として、「こどもの発達」と対応のポイントについてお話します。

②では特性についてです。発達の凸凹があるお子さんのこころの特徴と、特徴にあわせた対応のポイントをお話します。



早速ですが、私たちがよく親御さんから伺う子育てでの疑問をあげてみます。

「どうしてお友達とトラブルになるんだろう」

「どうして何度言っても同じことをするんだろう」

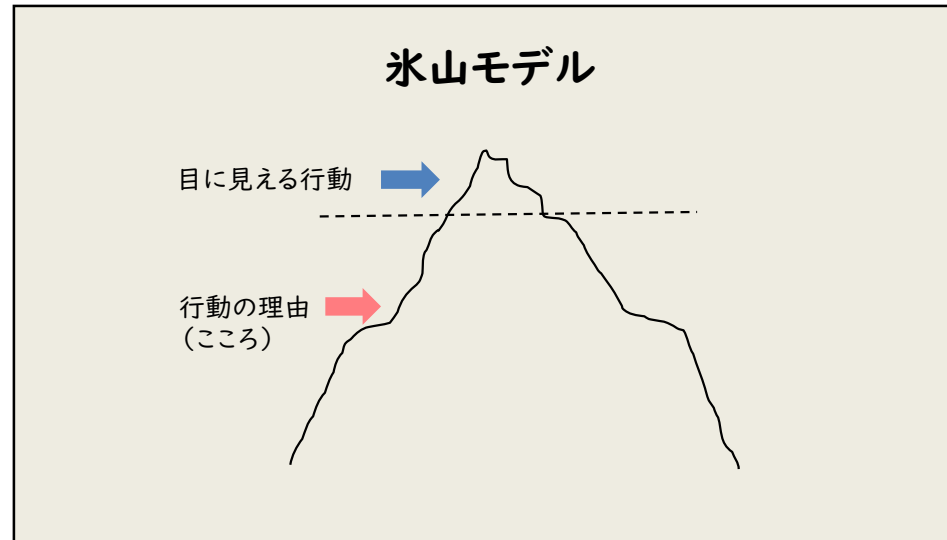
「どうしてこだわるんだろう」

「どうして座ってられないのだろう」

皆さんも同じような疑問をお感じになられたことがあるのではないのでしょうか？

これらすべては、お子さんの「ころ」が関係しています。

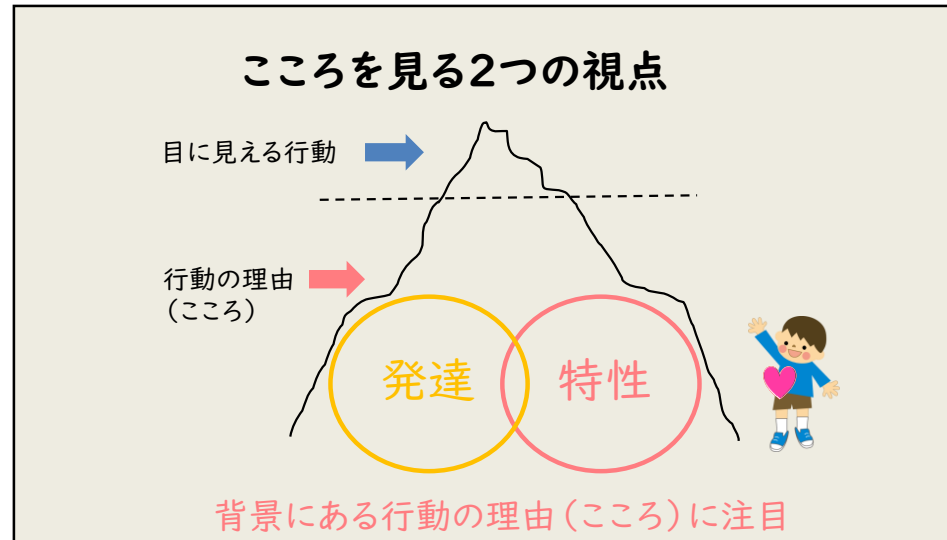
でも、ころは目には見えません。特に自分の気持ちを言葉で伝えられないお子さんには、行動から推測していくしかありません。



さきほどの疑問を解くヒントについて、少しお話します。

これは、冰山モデルという「目に見える行動だけではなく、行動の背景にある理由に注目しましょう」という考え方の図です。冰山をかたどったもので、点線は水面と思って見てみてください。水面の上の部分に、目に見えている行動があり、水面下に行動の理由、とあります。

このようにお子さんの目に見える行動、というのは氷山のほんの一部、一角にすぎず、行動の理由の方がたくさんあるのだ、という考え方です。



では、お子さんのこころをどうやって見ていくとよいのでしょうか。

その時に、2つの視点を意識するとお子さんの気持ちがわかりやすくなるかと思います。
一つめが「発達」そして、もう一つが「特性」です。

子どものこころをのぞいてみよう①では発達についてお話しします。

「発達」と聞いて、
どんなことをイメージしますか？

皆さんは、「発達」と聞いて、どんなことをイメージしますか？

発達という言葉が明確に説明するのは意外と難しいのではないかと思います。

辞書的な意味だと、筋肉の発達とか、産業の発達などのように使われ、

身体や精神などが成長して、より完成した状態や機能になるとか、機能がより高い程度に進む、発揮される、という意味で使われています。



これはお花が咲くまでの過程です。

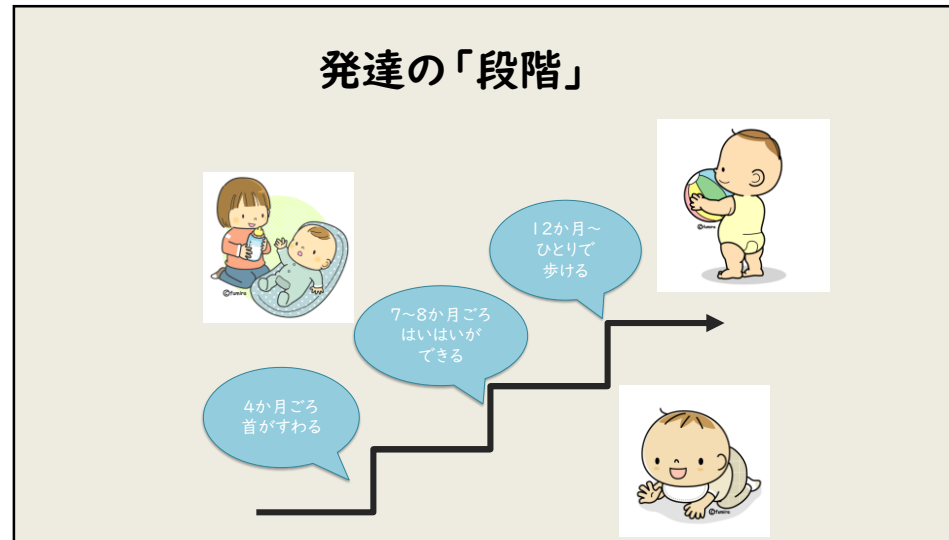
まず種があつて、そこにお水やお日様といった栄養を与えると、芽がでて茎が伸びて、葉っぱが増えて、つぼみがふくらんで、お花がさきます。

この種からお花がさくまでのプロセスを発達と考えて頂くとイメージしやすいかと思います。

植物には様々な性質があります。

植える場所を選んだり、水分を与えすぎではよくない植物もあれば、日光があまり当たらないところで育てたほうがいいものもあります。種を適切な場所に植えて、必要な分の栄養を与えると植物がよりよく成長し、お花が咲くことにつながります。

これを人に置き換えてみると、種は素質、そしてお水や日光という栄養は環境です。植物の場合、朝顔の種からは朝顔、ひまわりの種からはひまわりが咲き、もともとの素質が違うものになることはありませんが、その素質にあった環境が植物をより良い方向に育てていきます。発達のプロセスにおいても、その素質にあった環境がとても大切になります。環境を整えていくことが将来的に特性を良い形に発揮した大人になることに繋がっていきます。



お子さんの発達を見る時、大切なポイントが2つあります。

その一つ目が発達の「段階」です。

ここではわかりやすい運動発達を例に挙げてみました。

大体4か月ごろに首が座り、8か月ごろにハイハイをし、1歳を過ぎると大体歩き始めます。
このように、人は、一つの能力を身に着けるには小さなステップを一つずつ踏みながら
一段一段、階段を上がるようにしてだんだんと高度な能力を身に着けていくのです。

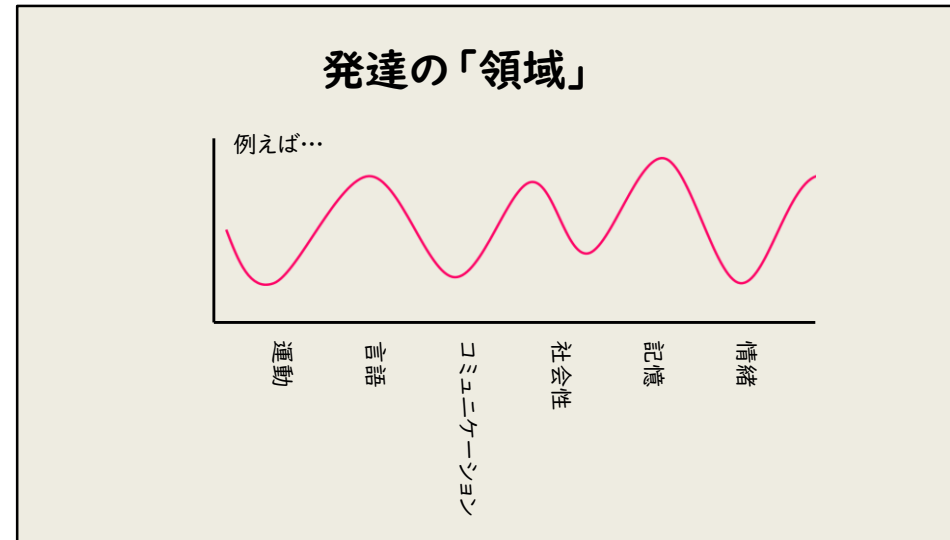
人間の場合、生まれてすぐいきなり立って歩いたりはできません。

これは、その他の事も同じです。

いきなり赤ちゃんがペラペラと話し始めるという事はありません。

バブバブという音を出す段階から、少しずつ言葉に近い喃語、と呼ばれるものを言いはじめ、それから人に伝わる言葉を話せるようになっていきます。

ですので、お子さんの発達を見る時、お子さんがいま何をどの位理解しているのか、
どの位の段階にいるのか、という事を知っておくことが大切です。



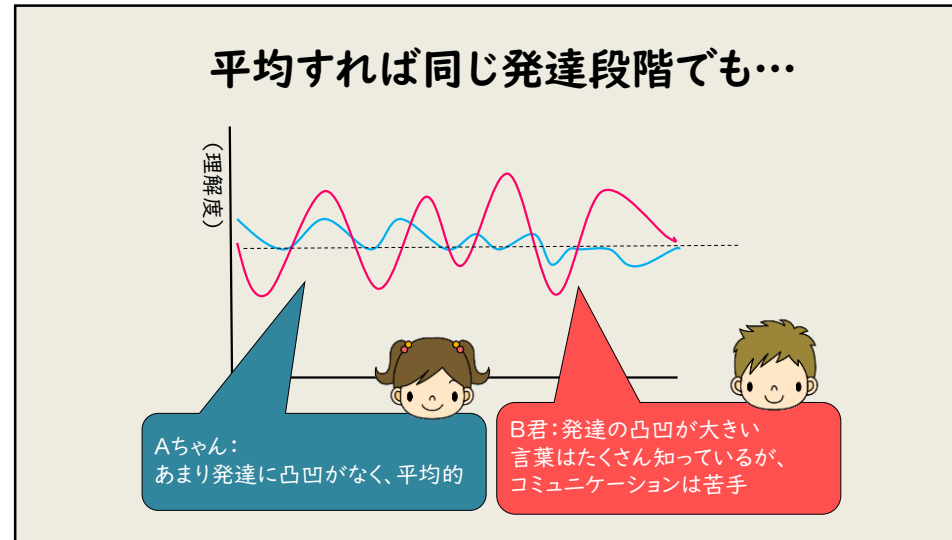
発達を見ていくときに大切なもう一つのポイントは、発達の「領域」です。

これは、横軸に色々な発達の領域、例えば、物事の理解であるとか、社会性やコミュニケーション等を・をあげてみました。
縦軸はそれぞれのいまどの位の発達の段階にいるかを表します。

ある部分は年齢以上の事が出来ているけれども、ある部分では年齢よりも低い事しかまだ難しい。
このように、同じお子さんであっても、発達の領域ごとに発達のスピード、発達の段階は異なっていたりします。

これは、私たちでも理系の人、文系の人などに当てはめると理解しやすいかもしれませんね。
誰でも凸凹はあり、得意分野、苦手分野があるものです。

ただ、発達凸凹があるお子さんはこの凸凹の幅がとても大きく、個人差の範囲を大きく超える方もいます。



ここに具体的に2人のお子さんの例を挙げました。
二人とも平均すれば、全体的には同じ3歳の発達段階にあるお子さんです。

Aちゃんは、あまり発達に凸凹がなく平均的なお子さんです。どの領域も波がそれほど大きくありません。
B君は、発達の凸凹が大きいお子さんです。領域ごとに大きく波が出ています。

この二人のお子さんへの支援は大きく違います。

Aちゃんには、何を教えるにしても、また、Aちゃんの行動の理由を考えるにしても、「大体3歳くらい」を目安にすればヒントが見つけやすいかもしれませんが、B君は、年齢よりもとてもよくできるか、年齢よりもとても低いかのどちらかになってしまっています。
この様なお子さんには、「何歳になったら、この躰をしましょう」という様な一般的な子育て本の目安では、あまりヒントは得られないかもしれません。

一つ一つの領域ごとに考えて、丁寧に見ていかないと適切な課題の設定は出来ません。

また、話す力と理解する力に差があると、本当は言われていることがよく分からなくてまごついている時に、「やる気がない」と言われてしまったり、あらぬ誤解を受けることになってしまいます。

ですから、お子さんの発達の段階と領域ごとの得意不得意をあわせて見てあげることが、とても大切です。

発達のペースと凸凹

■ 発達のペース (おそい・はやい)

➡ 発達段階に合わせた課題設定

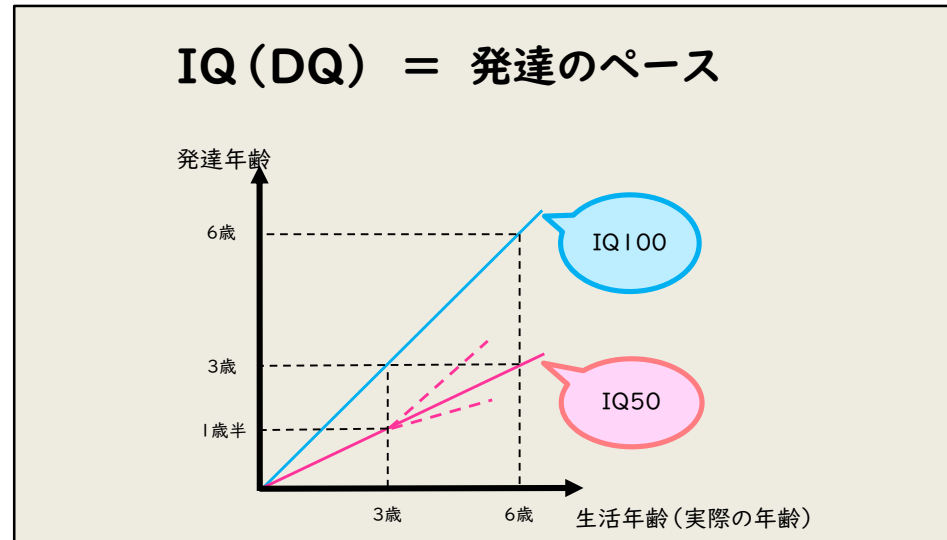
■ 発達の凸凹 (=特性)

➡ 特性に合わせた環境調整

お子さんの発達を理解するにあたって、2つのポイントがあります。

1つ目は、発達のペースを見ることです。この場合は、発達段階に合わせた課題設定が大切です。

2つ目は、発達の偏り、デコボコを見ることです。この場合は、特性に合わせた環境調整が必要です。



発達の遅さ／知的障害があるかどうかは、一般的に発達検査・知能検査で判断します。

検査をとったことがある方はお分かりかと思いますが、
検査をとると、知能指数/IQまたは発達指数/DQが結果として出されます。

IQ、またはDQは、発達のスピードを表し、100が平均です。

図は、IQ100とIQ50の方の例です。

IQ100では、生活年齢が3歳の時に発達年齢が3歳、6歳の時に発達年齢が6歳と、年齢相応の発達をしています。

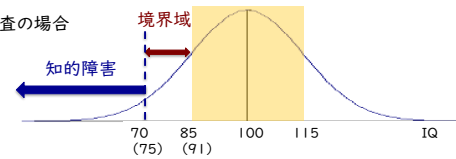
IQ50では、3歳の時に、発達年齢が1歳半、6歳の時に3歳となり、年齢の半分のペースで発達していく可能性を表しています。

多くの方は5.6歳の頃には、数値が安定していくと言われています。また、検査は毎年とる必要はありません。

そのため、医師や心理士など担当スタッフと相談しながら、検査時期を検討されるとよいでしょう。

IQ (DQ) による区分

一般的な知能検査の場合



療育手帳(愛の手帳)での等級 ※横浜市の場合

～20	A1(最重度)
21～35	A2(重度)
36～50	B1(中度)
51～75	B2(軽度)
(76～91)	自閉スペクトラム症の診断があれば、B2が取得可能(境界域)

知的能力 ≠ 生活能力

こちらは、IQまたはDQによる、知的障害の区分を表したものです。

グラフは、数値での人数分布を表したもの。

100を平均として、85～115に同じ年齢の約7割が入ると言われています。

一般的な知能検査の場合、数値70または75以下を知的な遅れがある、つまり知的障害があると判断します。

70～85を境界域。遅れはありませんが、同じ年齢の子どもたちと比べると、ゆっくりとなります。

参考までに、療育手帳の判断区分も載せています。

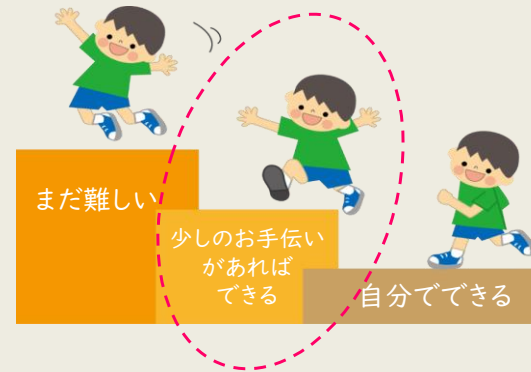
ここでお伝えしたことは、数値はあくまで検査で表された数値であるという点です。

知的能力は、生活能力とイコールではありません。

知的な遅れのあるお子さんも経験をもとに学び、生活スキルやコミュニケーションスキルを身につけていきます。

数値にとらわれすぎることなく、お子さんの社会生活上の適応力を重視することをお勧めします。

発達に合わせた対応のポイント



発達をふまえた対応のポイントについてお話しします。

つい「もう～才だし、～できないと！」と言ってしまうことはありませんか？

「発達」の視点に立つと、お子さんができるようになる時期は人それぞれです。

課題が発達段階に合っていなかった場合や、もしかしたらまだ難しかったかもしれないという時には、一度課題の難しさを下げてみてください。

お子さんたちが新たなことを身につけやすいのは、自分一人で出来ることと大人のお手伝いがあれば出来ることの、ちょうど間くらいのことを課題にして挑戦することです。

お子さんのペースに合わせて無理なく丁寧にスモールステップで教えていくことが大切です。

例えば、お仕度を全部自分でやるのではなく、最後の裾を入れるところは自分でやらせる、

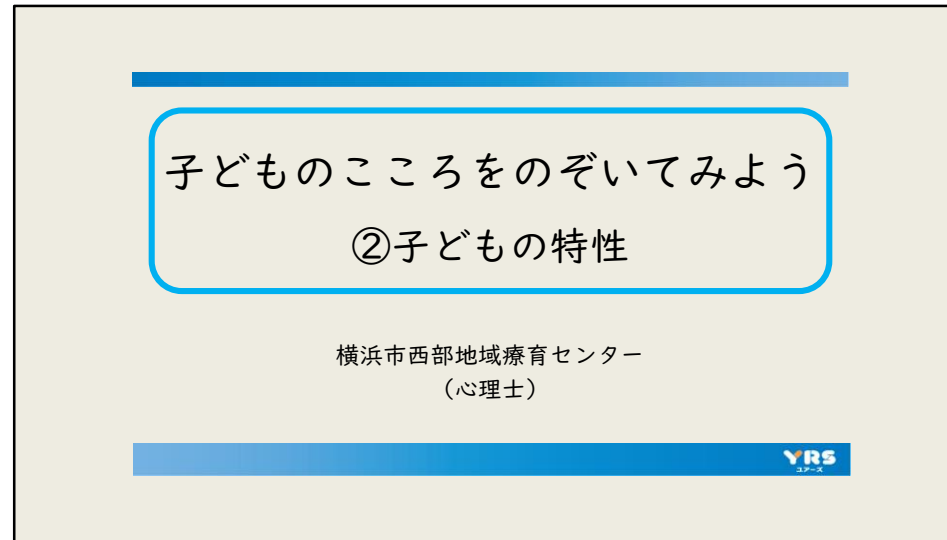
それがいつもお手伝いなしで出来るようになったら、ズボンに挑戦してみる。ズボンもいつもお手伝いなしで出来るようになったら、次はTシャツ...というように少しずつ課題を刻んで設定して、できたら褒めてあげることが大切です。

参考にした書籍

- 本田秀夫監修「発達障害がよくわかる本」(講談社)
- 佐々木正美著「発達障害の子に『ちゃんと伝わる』言葉かけ」(すばる舎)
- 本田秀夫監修「自閉症スペクトラムがよくわかる本」(講談社)
- 本田秀夫・日戸由刈著「ADHDの子の育て方のコツがわかる本」(講談社)
- 小道モコ絵著「あたし研究」「あたし研究2」(クリエイソかもかわ)

最後に、今回、参考にした書籍の紹介です。

①のお話はここまでです。ご視聴ありがとうございました。



基礎講座「子どものころをのぞいてみよう」②子どもの特性について、心理士からお話します。

子どもの発達と特性

(1) こころを見る視点①「発達」

発達の段階・領域・ペース

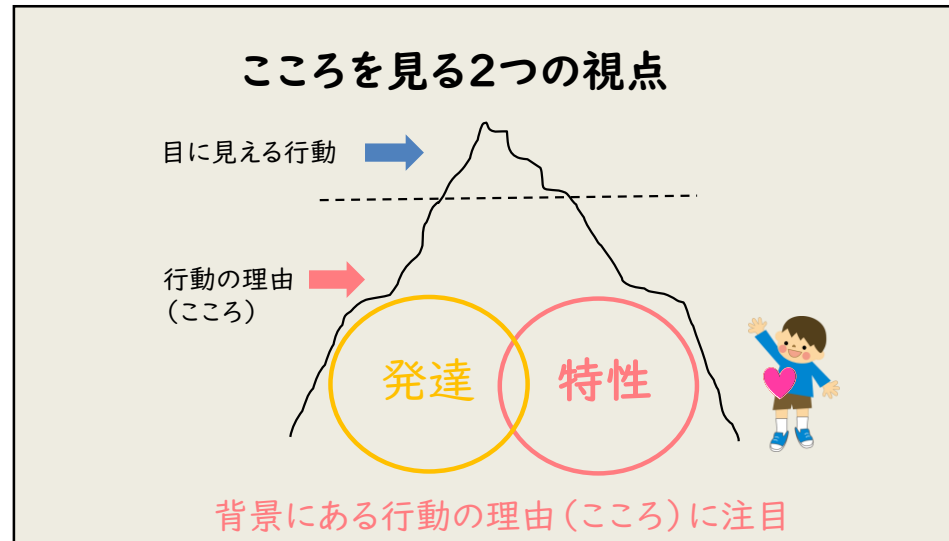
(2) こころを見る視点②「特性」

凸凹があるお子さんのわかり方・感じ方

子どもの発達と特性では、2部構成でお話します。

①では心を見る視点として発達について、お話ししました。

②でお話しするのは、発達の特性についてです。発達の凸凹があるお子さんのこころの特徴と、特徴にあわせた対応のポイントをお話します。



お子さんのこころを見ていく時に、2つの視点を意識するとお子さんの気持ちがわかりやすくなるかと思います。

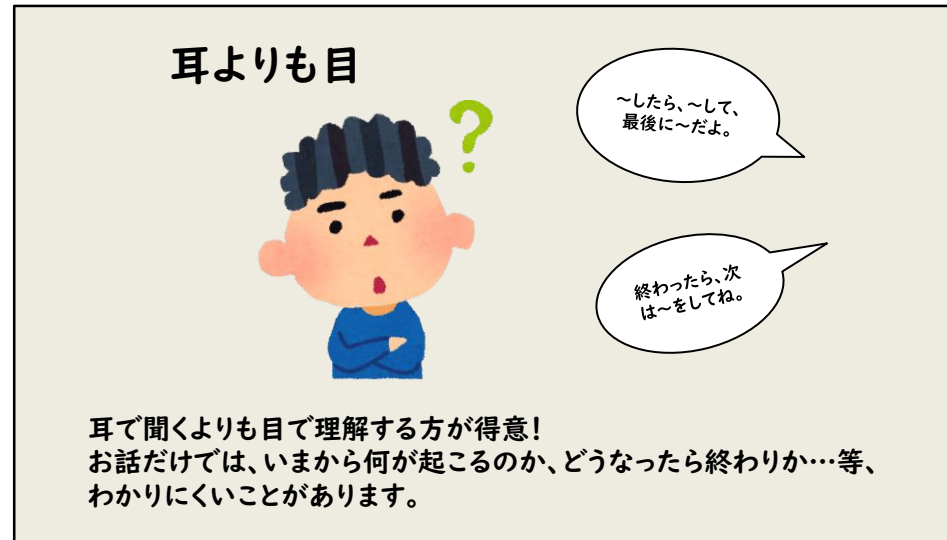
一つ目が「発達」そして、もう一つが今回お話しする「特性」です。

凸凹があるお子さんによくみられる「特性」

- 耳よりも目 
- 人よりも物・活動
- 情報の整理が苦手
- 見通しを持てないと不安
- 興味のツボがユニークで狭い
- 感情のコントロールが困難
- 感覚のアンバランスさ

わかり方・感じ方が
違う

では、発達の凸凹があるお子さんによくみられる特性をキーワードにしてあげてみます。



まず一つ目は、耳よりも目で理解する方が得意ということです。

お話だけでは、今から何が起こるのか、どうなったら終わりか…等、分かりにくいことがあります。

今から何が起こるのか、どうなったら終わりかを見てわかるように伝える工夫は、特性のあるお子さんの理解を助けます。



二つ目は、人よりも物・活動を優先させやすいということです。

イラストのように、お友達の状況に関わらず、物をパッととってしまうことや、相手に配慮することなく、思ったことを口にしてしまうというエピソードはありませんか？

特性のある方は、人の気持ちや状況よりもその場の物や活動がどうかで、行動してしまったり、発言してしまうことがあります。

情報の整理が苦手



情報に優先順位がつけられず、情報の整理が苦手なため、大事な話をきき逃したり、集中して活動に取り組めなかったりすることがあります。

次に、情報の整理が苦手ということです。

発達障害の特性のある方の中には、情報に優先順がつけられず、情報の整理が苦手という方がいます。
結果、大事な話を聞き逃したり、集中して活動に取り組めなかったりします。

大事なものは、情報の整理です。

今関係のない物は、シャットアウトし、見えなくすることも効果的です。

見通しを持てないと不安



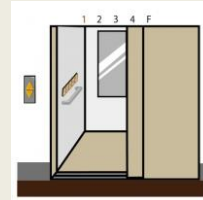
過去のことや好きなことは細かいことまでよく覚えている一方で、未来のことや、これから何が起こるのかなど先のことをイメージする、予測するのが苦手なことがあります。

次に、見通しを持てないと不安になりやすいということです。

特性のある方は、記憶がとても良い方がいます。「いついつ～したよね」と細かいエピソードを覚えている子がいます。一方で、これから何が起こるのかなど先のことを予想像する、予測するのが苦手な方が多いです。

これから何をするのか、どうなったら終わるのか、予定を伝えたりして、ぜひ見通しが立ちやすいように伝えてあげてください。

興味のツボがユニークで狭い



エレベーターが好きだったり、くるくるまわるものが好き、
鉄道が好き等、そのお子さんなりの興味のツボがあります。

興味のツボがユニークで狭い方もいます。

エレベーターが好きだったり、くるくるまわるものが好きなお子さんもいます。

鉄道好きのお子さんの中にも、路線図を見るのが好きな子もいれば、写真を撮ることが好きな“撮鉄”、エンジン音をきくのが好きな音鉄など、これまたいろいろです。

なぜこんなものを...？もっと他のことにも興味を持ってほしい！と思ってしまうですが、
興味のあるものからいろんなことを吸収していくものです。

そして、興味のツボを深めていくことは、将来の趣味・余暇の広がりにつながります。

お子さんの興味のツボはぜひ大事にしてあげてください。

感情コントロールが苦手



思い通りにならなくてかんしゃく、静かにしなければいけない場面で騒いでしまう等、感情のコントロールができるようになっていくのが、一般的な年齢よりももう少しあとになることがあります。

次は、感情コントロールが苦手ということです。

思い通りにならなくてかんしゃく、静かにしなければいけない場面で騒いでしまって...というご相談も多く受けます。

感情コントロール自体は、一般的に4・5・歳、年中さん・年長さんの頃に大きく変化する時期で、この年代の発達課題でもあります。

しかし、特性のあるお子さんは感情コントロールが発達課題になるのはもう少し後のことが多いようです。

ですから、幼児期は、自分で感情コントロールすることを狙うのではなく、クールダウンをできる場所を用意する、静かに過ごせるグッズを用意して過ごすなど、大人側が工夫したり、対応してあげるのがよいでしょう。

感覚のアンバランスさ



タグや縫い合わせのデコボコ、服の素材、突然耳に入る大きな音、偏食といった感覚過敏等の、感覚のアンバランスさがあることがあります。

最後は、感覚のアンバランスさです。

私たちでも服の素材によっては、タグが気になったりすること、ありますよね。
でも、それによって、偏頭痛で寝込んでしまう...とまではなかなかありません。

食べ物や、突然耳に入る大きな音などが苦手な方も多いです。
感覚過敏など感覚のアンバランスさがある人のつらさは、私たちの苦手とは次元が違う「つらさ」のようです。

特性のある方の多くに、感覚のアンバランスさがあると言われています。
耐えさせることよりも、まずは、無理をしないで苦手な場を「避ける術」を身につけましょう。

特性に合わせた対応の工夫

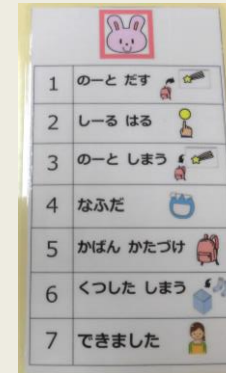
- 1 目で見てわかりやすく 
- 2 予告をする
- 3 刺激を整理する
- 4 興味に合わせる
- 5 はっきりとほめる
(その場で、ハイタッチなど)

「特性」に合わせた対応の工夫について、ポイントを挙げてお話しします。

- 1、「目で見てわかりやすく」
- 2、「予告をする」
- 3、「刺激を整理する」
- 4、「興味に合わせる」
- 5、「はっきりとほめる」

少し、療育の場で実際に行っているものを例に挙げてみます。

目で見てわかりやすく



特性のある方は、耳よりも目からの情報に強い方が多いので、何をどこに片づけるか、次に何が始まるかなど、目で見て分かるようにすると、特性のあるお子さんの理解を助けます。

予告をする

今日のスケジュール



ピピピってなったら
おしまい



長いハリが2になったら
終わりだよ～



予告する。

先ほどの目で見てわかりやすくにもあったように、スケジュールや手順表は、次は何かを伝える予告にもなります。

タイマーや時計を使って終わりを伝えたり、10数えておしまいという声かけも予告ですね。

見てわかる形でなくても、何かをする前に、言葉で予告することでわかるというお子さんもいます。

例えば、スーパーに入る前に、「手をつなぎます」と伝えて、手をつなぐといった対応もひとつの予告です。

刺激を整理する



情報の整理が苦手なお子さんは、

関係のない刺激を無視できないこともあります。この場合、関係のない刺激は見えないように隠してあげる、というのも工夫の一つです。

ご家庭の生活では、ごはんを食べる時はテレビを消す、おもちゃの棚をタオルで覆うなど、これだけでも効果があるということがあります。

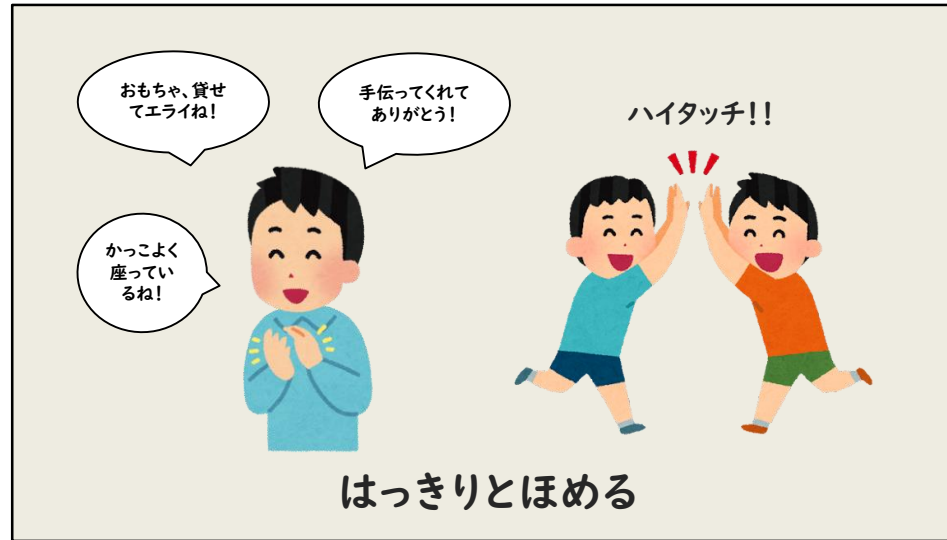
興味に合わせる



トイレに好きなキャラクターを貼って、トイレに行くことを楽しみにできるようにする、おきがえをがんばったら、お気に入りのシールを貼るというのもひとつです。

お子さんの興味に合わせて、好きなものを取り入れて、活動に意欲的に取り組めるようサポートすることも大切です。

例えばトイレに好きなキャラクターを貼って、トイレに行くことを楽しみにできるようにする、お着替えをがんばったら、お気に入りのシールをはるというのもひとつです。



発達の凸凹があるお子さんは、失敗からは学びにくいことが多いです。

失敗よりも、成功体験で「できた!」「ほめられた!」から、学んでいきます。できればその場で、そして、ハイタッチをしたりして、はっきり・しっかりとほめてあげましょう。

凸凹があるお子さんを理解するポイント

- **わかり方や感じ方が違う**（優劣ではない）
「**特性**」により、「特有の発達スタイル」がある
- 目標は、二次的な問題の予防
 - ・ **安心・わかるの環境**を保障
 - ・ 周囲の理解者を増やすことが重要

参考：本田秀夫監修（講談社）
発達障害がよくわかる本
自閉症スペクトラムがよくわかる本

発達に凸凹があるお子さんの理解のまとめです。

凸凹は、「**特有の発達スタイル**」であり、「**症状**というよりも**特性**」です。

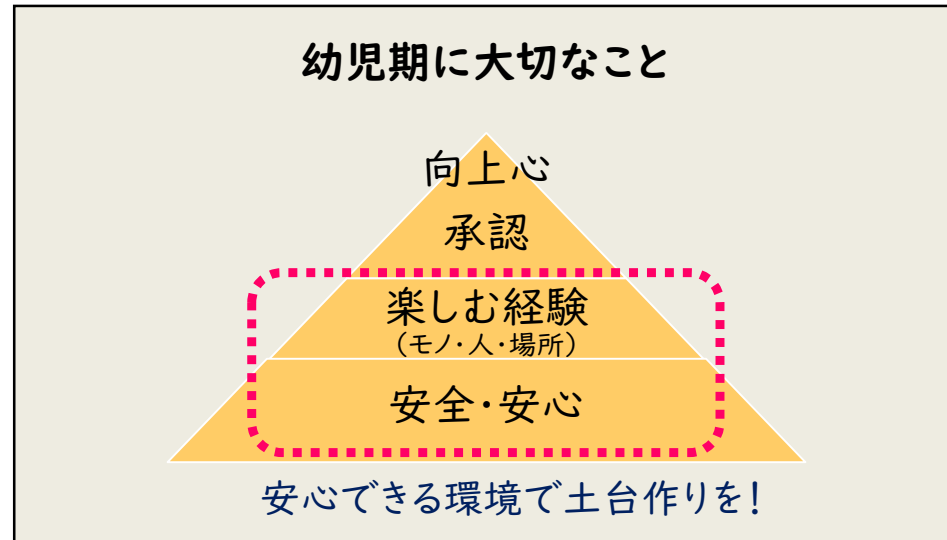
わかり方や感じ方が違うのであって、優劣ではありません。

目標は、二次的な問題の予防です。

特性のあるお子さんは、ストレスに弱い方が多いと言われています。

「**安心・わかる**」の**環境**を保障 し、 周囲の理解者を増やすことが重要です。

それぞれのお子さんの特性に合わせた環境調整を一緒に考えていきましょう。



最後に、まとめにかえて、幼児期に大切なことをお話します。

この図はお子さんが自己肯定感を育むために必要なことをモデル図にしたものです。

下から順に、十分な経験を積み重ねていくことが大切です。

安全・安心: 脅かされずに、安全で安心な環境で過ごすこと

楽しむ経験: 楽しめる物があり、人と楽しむ、楽しめる場所があること

幼稚園や保育園は、お子さんにとって楽しめるものがある、居場所になっていますか？

そして、承認: 人から認められる経験と積むこと。「いいね!」「すごいね!」とほめられる・認められる経験は、お子さんの向上心、新たなチャレンジへの心をはぐくみます。

幼児期は、大人から。大きくなると、同年代の子から認められる経験をたくさん積めるといいですね。

何事も土台作りが肝心です。幼児期は、特に、安全・安心な環境で、楽しむ経験をたくさん積めることを大切にしてください。

参考にした書籍

- 本田秀夫監修「発達障害がよくわかる本」(講談社)
- 佐々木正美著「発達障害の子に『ちゃんと伝わる』言葉かけ」(すばる舎)
- 本田秀夫監修「自閉症スペクトラムがよくわかる本」(講談社)
- 本田秀夫・日戸由刈著「ADHDの子の育て方のコツがわかる本」(講談社)
- 小道モコ絵著「あかし研究」「あかし研究2」(クリエイソかもかわ)

今回、参考にした書籍の紹介です。

②のお話は終了です。ご視聴ありがとうございました。